

第一章

僕には二つ違いの妹がいます。僕は誠也せいやといって、妹は麗美れみといいます。

僕は小さい頃から麗美が可愛くて仕方がありませんでした。妹が欲しいと思っていた僕は麗美が生まれた時は嬉しくて飛び上がったほどです。

僕がなぜ妹が欲しいと思っていたのか、その頃は明確には分かりませんでした。弟より妹がいい。もっと言えば、男よりも女がいいという、ふしだらな理由からでした。

僕は麗美のことをよく抱きしめていました。それは彼女が小学校の一、二年生の頃までそうしていたと思います。

僕が麗美を抱きしめている姿を両親は微笑ましく見ていました。それはきっと「誠也は麗美のことがよっぽど可愛いんだろぅな」というふうに思っていたからだと思います。確かにそれもありますが、実際には違うのです。僕は性的な感情で、麗美を抱きしめていたのです。

当時はまだ性についてのことはよく判っていませんでしたが、本能的な部分でそうしていたのだと思います。あまりよく覚えていませんが、抱きしめながらドキドキしていたのかも知れません。

もちろん普通の子供がそうするように、麗美の手を引いて、近所に遊びに行ったりもしていました。公園でブランコをしたり滑り台をした

りと、普通の遊びもしていました。とにかく僕は麗美のことが可愛くて仕方がなかったのです。

ほっぺにチューなんて普通にしていました。さすがにその年で唇にはしていませんでした。なぜかそれはしてはいけないと認識していたのです。う。ほっぺにはしていましたが、唇にはしませんでした。

そして時々母に言われて、麗美とお風呂に入ることもありました。母が忙しくて、手が離せない時に、「せいちゃん、レミちゃんとお風呂呂に入っちゃって」と言われ、一緒に入って、麗美の体を石鹸で洗ったりしていました。

そういう時も僕は麗美を抱きしめていたのです。お風呂なので当然裸です。服を着て抱きしめるのとぜんぜん違いました。裸同士で抱き合っていると、すごく気持ちよくて興奮することを知ってしまったのです。僕

は小学校の二年生で、麗美はまだ保育園の年長でしたので、本人は意味が解らずにキョトンとしていたと思います。

一度、その味を知ってしまった僕は、母に「麗美をお風呂に入れて」と言われる度に、物分かりがいいような振りをして、喜んで麗美と一緒に風呂に入っていたのです。そして風呂に入っては裸で抱きしめていました。

それだけでは飽き足らず、お風呂以外でも両親がいない時は、何も解らない麗美を裸にして抱きしめていたこともありました。